

ヘルマン・ヘッセの『シッダールタ』について —葛藤の不在がもたらす問題をめぐって—

中原 香 織

はじめに

1922年に発表されたヘルマン・ヘッセの『シッダールタ』¹は、古代インドを舞台とし、実在の宗教家仏陀とその名を同じくする青年シッダールタを主人公にもつというその特異性から、今日にいたるまで、インド古来の仏教はもとより、道教、禅、神秘主義、キリスト教など様々な宗教的見地からアプローチが試みられてきた²。しかしその一方で、あまりにも作品の思想的側面ばかりにとらわれ、あくまでも一小説として読む機会が奪われてきたのも事実である。強い宗教的色合いが作品を支配していることは確かだが、この小説の特殊性はそこにばかりあるのではない。この物語をヘッセ文学の一作品として捉えるとき、われわれはそこに不可欠な要素の不在に気づく。それはつまり、主人公の葛藤である。

甘い郷愁を誼みあげる初期の叙情的作品から転換を示す『デミアン』(1919)において、ヘッセは主人公の少年シンクレールが、自らの育った「明るい世界」とデミアンとの出会いによって発見した「暗い世界」をともに自身の内側に認めることによって真の自分になるまでの過程を描いた。同時期に執筆された短編「クラインとワーグナー」(1919)では、それまで小市民的生活を営んでいた実直なひとりの男が、金を横領し逃亡した末に、かつて強烈に嫌悪の対象としていた大量殺人者ワーグナーの性質を自身の内側に発見するまでが描かれている。そして、彼の五十歳の記念碑的作品『荒野の狼』(1927)では、常に自分の中に激しくせめぎ合う二つの自己を持つ、荒野の狼と名乗る中年男がフモール(Humor)によって調和に至る。さらに、人間の二元性をふたりの異なるタイプの少年に描き出し

¹ 『シッダールタ』は、Hesse, Hermann: Gesammelte Werke in 12 Bänden. Frankfurt a. M. 1987 (以下GWと省略する)に拠った。

² 先行研究からそれぞれのアプローチごとに代表的なものを以下に挙げておく。仏教の見地から: Schaw, Leroy R.: Time and Structure of Hermann Hesse's Siddhartha. New York 1957. 中国哲学・道教の見地から: Hsia, Adrian: Siddhartha und China. In: Hermann Hesse und China. Frankfurt a. M. 1974. インド哲学の見地から: Genesha, Vridhagiri: Siddhartha und Indien. In: Das Indierleben Hermann Hesses. Bonn 1974. Timpe, Eugene F.: Hesse's Siddhartha and Bhagavad-Gita. Oregon 1970. キリスト教・神秘主義の見地から: Mayer, Gerhart: Die Begegnung des Christentums mit den asiatischen Religionen im Werk Hermann Hesses. Bonn 1956. Rose, Ernst: Faith from the Abyss. Hermann

た、後期の大作『ナルチスとゴルトムント』(1930)では、主人公ゴルトムントは世の一切の対立や矛盾に苦しみながらも、それを生の可能性ととらえ味わい尽くそうとする。このように、ヘッセの小説においてその物語を引っ張ってゆく動機とは、多くの場合、二元間を揺れる主人公の激しい心の葛藤であり、それがまたヘッセ文学における大きな特徴ともなっているのである。

ところが、『シッダールタ』にはこの葛藤が完全に欠落している。バラモンの子として生を受けた主人公シッダールタは、森で暮らす修行僧、商人、渡し守と次々にその姿を変化させ、彼の住む世界の変化が物語の展開の軸となっている。しかし、その移行において Casebeer が指摘するように「彼自身の葛藤の意識はほとんどみられない³⁾」。シッダールタにはそれまで自分が生きていた世界の価値観と自らが目指す目標との間でゆれ動き苦悩する、ということがない。彼は、悟りという自己の目標に到達するためには何ら抵抗を感じることなく新しい生を受け入れるのである。まさに「目標が彼を引き付ける(401)⁴⁾」かのよう。

また、この葛藤の不在は作品の構造にもあてはまる。この作品に「時間構造と空間構造のパラレル」の存在を指摘する Ziolkowski は次のように述べている。

われわれはここに精神と自然というあの馴染み深い二元性を見るが、『シッダールタ』において、このふたつの領域は、シンクレールが常に明るい世界と暗い世界の間で揺れ動く『デミアン』の場合のように交じり合っていない。そうではなくて、初めの二十年間の一区切りが知性を培うことに、さらなる二十年間の一区切りが感覚を培うことに費やされるのである。その上それぞれの期間は地理的に異なる場所で展開され、シッダールタが渡るあの象徴的な川によって隔てられている。⁵⁾

つまり、特徴的なあの両極の対立はたしかに描かれてはいるが、しかし空間的・時間的に二つの世界は互いに離れていて作用しあうことがなく、そのために摩擦が生じることもないのだ。このように、『シッダールタ』はその構造によっても葛藤の不在を示しているといえる。

ところで、こうした特異性は登場人物の役割を考えるうえでも非常に重要である。ヘッセの作品には、主人公の葛藤という要素とときわめて密接な関係にある二つのタイプの登場人物が存在するからだ。そ

Hesse's Way from Romanticism to Modernity. New York 1965.

³⁾ Materialien zu Hermann Hesses »Siddhartha«: Hrsg. von Volker Michels. 2Bände. Frankfurt a. M. (以下 MS と省略する) Bd.2 1976 S.169.

⁴⁾ 以下本文中括弧内の数字は GW Bd. 5 のページ数を示す。

⁵⁾ Ziolkowski, Theodore: The Novels of Hermann Hesse. A Study in Thema and Structure. Princeton 1965 p.156.

れは、『荒野の狼』のヘルミーネや「クラインとワーグナー」のテレジーナのように、主人公を官能の世界へと導く性的魅力にあふれた女性、そして、デミアンやナルチス、あるいは『荒野の狼』に登場するパブロのような主人公の片割れとも言えるべき男性である。彼らは常に、主人公にもう一方の世界の存在を知らしめ、葛藤の渦へと巻き込む役割を果たす。この特徴的な二つのタイプの人物が、『シッダールタ』においては遊女カーマラと主人公の友ゴーヴィンダにあたることは明らかである。では、主人公の葛藤が描かれないこの作品において、彼らはいかなる役割を担っているのだろうか。

本稿は、従来の宗教的側面から読む立場からは一步退いて、葛藤の欠落という作品の特異性に着目し、二人の登場人物の役割を足がかりに、『シッダールタ』の小説としてのさらに広い理解と解釈の新しい可能性を追求するものである。

1 ゴーヴィンダ

バラモンの子としてシッダールタとともに成長したゴーヴィンダ。彼とシッダールタとの関係は物語の初めに明確に表現される。

シッダールタがいつか神となったなら、彼がいつか輝かしいものに加わったなら、ゴーヴィンダは彼についてゆこうと思った。彼の友として、彼の道連れとして、召使として、槍もちとして、彼の影として。(356)

シッダールタの影であるゴーヴィンダ。この二人の関係は、われわれにヘッセの作品に特徴的なあの主人公とその友の関係を連想させる。つまり、『車輪の下』におけるハンス・ギーベンラートとヘルマン・ハイルナーや、『デミアン』におけるエーミール・シンクレールとマックス・デミアンなどの、常に人間の二元性が投影されたあの組み合わせを。それは『ナルチスとゴルトムント』においても巧みに描かれており、作品ごとに程度の差はあるものの、ヘッセ作品の特徴のひとつをなしていることは疑いようがない。しかし、この作品においては二人の関係は少し異なっている⁶。「影(Schatten)」といっても、それはたとえばシンクレールの住む清く明るい世界と対比された、デミアンの住むどこか邪悪なものをもはらむ暗い世界を指すのではなく、あくまでもシッダールタの後についてくるもの、分身、影そのものを意味するのであり、その点では彼らの関係は「光と影」と表現することはできない。『シッダールタ』にいたるまで、ヘルマン・ハイルナーにしろ、デミアンにしろ、彼らは主人公とは一見正反

⁶ C. I. Schneider は「二人がともに人生の決定的な転換点において僧ナルチスと彫刻家ゴルトムントと同じように助け合い、自己の認識へといたることを考えるなら、この小説は『ゴーヴィンダとシッダールタ』と名づけられることも可能であったはずである。」(Siddhartha. Eine indische Dichtung. Stuttgart 1994 S.64)と主張するが、ナルチスとゴルトムントの性質の上で互いに補う関係もまたシッダールタとゴーヴィンダにはあてはまらない。

対に見える強い個性でもって強烈に訴えかけ、反発や憧れを引き起こすとともに、そのもう一つの世界に目覚めさせる役割を演じている。それにくらべて、ゴーヴィンダは非常に個性に乏しく、なによりも主人公であるシッダールタになんら働きかけることがないのである。それゆえ、シッダールタはゴーヴィンダに存在によって悩まされることも、葛藤することもない。では、ゴーヴィンダはどのような役割を果たしているのだろうか。

十二章からなるこの小説の中で、ゴーヴィンダの登場する部分は主に最初の三章と最終章に限られている。前者にはシッダールタとともにバラモンのもとを去り、森で苦行者、沙門となった後、仏陀の信徒となって彼と別れるまでが、後者には何十年もの年月を経た後の、渡し守となったシッダールタとの再会が描かれている。この章では、はじめの三章について取り上げることにする。

森の苦行者となり多くの修行を身に付けるが、依然心満たされないシッダールタに対し、ゴーヴィンダは自分達ですでに多くのことを学び着実に悟りへと近づいていると信じて疑わない。シッダールタは彼に、苦行の無意味さ、師である老沙門たちへの不信を語り、さらに、何かを「学ぶ」ということは存在し得ないのだと告げる。この彼の言葉に強い不安を与えられ、ゴーヴィンダは「もしそうなら、バラ蒙の身分の尊さは、沙門の神聖さはどこにあるだろう!? 地上の神聖なもの、価値あるもの、尊いものはみなどうなるのだろうか!? (369)」と訴え、抵抗せずにはいられない。このようにゴーヴィンダは伝統的形式や権威にしがみついた人物として描かれ、これを Boulby は『ファウスト』のワグナーに譬え、さらに『車輪の下』で示された「マウルブロンンの教師たちの考え方⁷」、つまり階級制度とあらゆる教育がもたらす権威への固執を象徴していると考ええる。この後、二人は仏陀と対面するが、シッダールタが教えによって悟りを得ることの不可能を確信するのに対して、ゴーヴィンダはすぐさま弟子となることを申し出て教えを乞い、さらに友にも帰依することを強く求める。このように、ゴーヴィンダには教えを否定するシッダールタのことが全く理解できないわけだが、こうした彼の姿については Boulby の指摘よりもさらに広い解釈が可能である。その根拠は以下に挙げる二つの箇所に見出すことができる。はじめに引用するのは、シッダールタがゴーヴィンダとゴータマとの別れに思いをめぐらす場面である。

彼は私から友を奪った。私を信じていた友はいまや彼を信じている。私の影はいまやゴータマの影となった。しかし、彼は私にシッダールタを、私自身を与えてくれた。(382)

そして、彼はさらに自らの人生について振り返る。

⁷ Boulby, Mark: Hermann Hesse. His Mind and Art. Ithaca 1967 p.136.

シッダールタが完全なる人、仏陀の残るあの林園を去ったとき、彼は、この林園に彼のこれまでの生もまた置いてくるのだと、それはもはや彼から離れてしまったのだと感じた。(中略)彼はひとつのものが彼のもとを去っていったと確信した。若い時代を通じて彼に付き従ってきたひとつのものの、彼に属していたひとつのものがもはや自分のなかに存在しないことを確信した。すなわち、それは師を持ち教えを聞かんとする願望であった。(383)

「若い時代を通じて彼に付き従い、彼に属していたもの (das durch seine ganz Jugend ihn begleitet und zu ihm gehört hatte)」という表現が、ともに生い立ち、ともにバラモンのもとを去り、沙門となって修行を続けてきた彼の影、ゴーヴィンダをほめかしていることは明らかである。さらに、「仏陀のもとへ置いてきたもの」という共通項で結ばれることによって、ゴーヴィンダとの別れが、「師をもち、教えをきかんとする願望 (der Wunsch, Lehrer zu haben und Lehren zu hören)」との別れであったことがここでは暗示されている。つまり、ゴーヴィンダこそが主人公の内部に長く潜んでいた自己の外に救いを求めんとする側面だったのである。それゆえ、ゴーヴィンダとの別れの後、シッダールタは「仏陀は私にシッダールタを、私自身を与えてくれた」と感じ、自己の内部へと深く眼を向けることを初めて誓うのだ。彼自身それを目覚めと呼ぶように、彼にとって解脱への道はまさにこの時始まったのだ。

さらにゴーヴィンダとの別れがもたらす彼の変化を、われわれは次にあげる洗濯女のエピソードにみることができる。川を渡り町へと向かう途中の村の外れで、シッダールタは小川で着物を洗う一人の若い女に道を尋ねる。彼はその女に誘惑され、「性の泉が動く (392)」のを感じるが、その瞬間、彼は自らの「内面の声 (die Stimme seines Innern)」が否と言うのを聞く。するとたちまち、笑みを浮かべた女の顔からあらゆる魔法は消え去り、彼にとってはもはや盛りのついた獣のメス以外の何ものとも映らなくなる。この後、シッダールタはこの女ではなくカーマラによって官能の世界へと足を踏み入れるわけだが、この印象的、かつ話の展開になんら影響を及ぼさないシーンが唐突に挿入されることによって、われわれはシッダールタが単に禁欲の生活から官能の生活へと移行したのではなく、外部の命令に従う生が終わり、内面の声に従う生が彼のなかで始まったことを知るのである。

こうしてゴーヴィンダとの別れがシッダールタの内面への道の始まりとなるわけだが、ゴーヴィンダは単に主人公のもとから去ってゆくだけでその役割を果たし終えたのだろうか。作者はゴーヴィンダの役割を考える上で非常に意味深い場面を用意する。それはこの後川辺の渡し守の小屋で見る夢の一場面である。

ゴーヴィンダが黄色い修行僧の衣を着て彼の前に立っていた。ゴーヴィンダは悲しげな表情をして、「君はどうしてわたしのもとを去ったのか。」と悲しそうに尋ねた。シッダールタは彼に腕を

まわして抱いた。シッダールタは自らの胸にゴーヴィンダを引き寄せ口づけすると、それはもはやゴーヴィンダではなく、ひとりの女だった。女の着物からは豊かな乳房があふれ、シッダールタはそれに寄り添い飲んだ。この乳房がもたらす乳は甘く、強い味がした。それは女と男の、太陽と森の、動物と花の、あらゆる果実の、あらゆる快樂の味がした。それは酔わせ、意識を失わせた。(390)

この奇妙な夢が示すものは一体何であろうか。さまざまな解釈の可能性が存在すると思われるが、ゴーヴィンダの姿に象徴されるこれまでの禁欲的な生活から、女性の姿に象徴されるこれからの官能的、感覚的生活への移行を暗示することはまちがいないだろう。さらにこの女性をカーマラととる解釈もいくつかあるが、その根拠は示されておらず、あえてそうに断定する必要もないように思う。なぜなら、ここで注目すべきは、ゴーヴィンダが女性へと変化すること、つまり主人公の夢の中に彼が雌雄同体の人物として登場するという事実だからである。それは『デミアン』で主人公シンクレールの夢に登場する、あの男とも女ともつかない人物を思い起こさせる⁸。そこではその人物はシンクレールの到達すべき目標、すなわち真の自己の象徴として提示され、大きな役割を担っている。では、『シッダールタ』においてはどうか。これについて、Ziolkowski はこの夢が川のほとりで見られることに特に注目して、「この夢の奇妙な雌雄同体の人物の抱擁によって精神と官能の二つの世界が統合される」と主張し、この夢自体を「シッダールタが最終的に川から得る全体性と同時性 (totality and simultaneity) のヴィジョン」の先取りであると解釈する⁹。一方で、Patnaik はさらに一步踏み込んで、この夢が「物語の最後でゴーヴィンダが見る統一のヴィジョンと緻密なパラレル¹⁰」を描いていると推察する。両者はともに、この夢の中にシッダールタが後に到達することになる統一・悟りが表現されていると考える。しかし、ゴーヴィンダの役割という問題に焦点を合わせるならば、Patnaik の分析がより興味深いように思われる。それによると、最終章でゴーヴィンダがシッダールタの顔に見ることになる統一のヴィジョンを、ここでは逆にシッダールタがゴーヴィンダの姿に先取りして見ていることになる。さらに、夢の中でシッダールタがゴーヴィンダにするキスもまた、最終章でゴーヴィンダがシッダールタに捧げるキスを連想させる。

このようにこの奇妙な夢は主人公の最終目標を暗示するだけでなく、今別れたばかりのゴーヴィン

⁸ 『デミアン』ではその夢は次のように表現される。「家の中では母が私を迎えた。しかし、私が入って行って、母を抱擁しようとする、それは彼女ではなく、見たこともない人物だった。大きくて強そうで、マックス・デミアンと、私の描いた絵に似ていたが、しかし異なるものだった。強そうであったが、まったく女性的であった。この人物は私を引き寄せ、戦慄するような深い愛の抱擁に私を受け入れた。」(GW Bd.5 S.94)

⁹ Ziolkowski, p.160.

¹⁰ Patnaik, Deba P.: Govinda. In: MS Bd.2 S.193.

ダが、彼の真の役割を果たすために物語の最後で再び戻ってくることを、はやくも予感させるのである。

2 カーマラ

この作品に登場する唯一の女性カーマラは、インドの愛と歓楽の神カーマデーヴァをほめめかすその名が示す通り、シッダールタを官能の世界へ導く役割を果たしている。彼女は愛の技巧において長けているだけでなく、非常に美しく性的魅力に満ち、娼婦であるにもかかわらずけっして他に従属することのない女性として描かれる。

われわれはこうしたタイプの女性をヘッセのほかの作品においても見つけることができる。たとえば、「クラインとワーグナー」の踊り子テレジーナや、『荒野の狼』のヘルミーネ、あるいは『ナルチスとゴルトムント』の総督の愛人アグネスなどがそれにあたる。とりわけカーマラとテレジーナの描写の類似性を指摘する Boulby においては「両者はつねに良心に拘束された小市民、つまりフリードリッヒ・クラインをむかつかせ、恐れさせるタイプである。(中略)カーマラは疑いなく(テレジーナと)同じ人物である¹¹」。しかし、クラインがテレジーナの内に何らかの暗いものが潜んでいることを感じ取り、はじめのうちは彼女に嫌悪感さえ覚えるのに対して、シッダールタははじめから、彼女にためらいも恐れも抱くことはない。まだバラモンのころ、通りかかった沙門を目にするなり、すぐに彼らのもとで苦行者になることを決意したのと同じように、町の入り口で初めてカーマラの姿を見かけたその直後、彼はすでに彼女のもとで愛を学ぶという目的を明確にして町に入り、彼女に愛の手ほどきを請う。つまりカーマラが官能の世界の女主人であることはたしかだが、しかし、主人公を嫌悪と憧れの葛藤の渦へと巻き込むことは彼女の仕事とはならないのである。

さらに、カーマラには官能の他にも重要な役割が残されているがために、彼女はあの特徴的な女性たちとは決定的に異なる要素をもつ。つまり、このタイプの女性たちが通常、主人公を官能の世界へと誘うことでその役目の大半を果たして去ってゆくのにに対して、カーマラだけは妊娠し、主人公の息子を生み、ふたたび彼の前に帰ってくるのである。シッダールタが自分の前から姿を消したその日から、もはや娼婦であることをやめたカーマラは、最後の歓会の時に彼の子を身ごもったことを知る。歳月が経ち、臨終を迎えた仏陀にひと目会うために、幼い子連れて巡礼の旅に出たカーマラは、川のほとりで毒蛇に噛まれ、今や渡し守となったシッダールタとヴァズデーヴァの小屋へ担ぎ込まれ、シッダールタに見取られるなか死んでゆくのである。

カーマラとの再会と死、そして息子との対面は、シッダールタの生にとって極めて重要な影響を及ぼすことになる。ここで、カーマラには官能以外の役割が与えられるのだ。すなわち、シッダールタを

¹¹ Boulby, p.142.

愛と無時間性(Zeitlosigkeit)という完成に不可欠な認識へと導く役割¹²。

2. 1

蛇にかまれたカーマラが死んでゆく場面は非常に重要である。Seckendorffは「彼女は死に際してなお、シッダールタのために最後の役割を果たす¹²」と指摘する。その場面は次のように語られる。

彼はながいこと座ったまま、永遠の眠りについた彼女の顔をみつめていた。(中略)長いこと彼は座って、その青白い顔を、疲れたしわを読んでいた。彼の心はその面影に満たされた。彼は同様に自分の顔が横たわっているのを見た。同様に白く、生気を失った顔を。そして自分の顔と赤い唇と燃えるような瞳をした若い頃の彼女の顔を同時に見たとき、今この時という感覚に、すべての時は同時であるという感覚に、永遠という感覚に彼は全身をつらぬかれた。深く、いつよりも深く、この時彼はあらゆる生命の滅びがたいこと、あらゆる瞬間の永遠を感じた。(442)

ここで「あらゆる瞬間の永遠(die Ewigkeit jedes Augenblicks)」と表現されているものは、シッダールタがヴァズデーヴァのもとで渡し守となって最初に川から学んだ、「時間は存在しない」という秘密と同義である。シッダールタがカーマラの死に際して彼の完成に不可欠なこの認識をさらにつよく確信するのは偶然ではない。なぜなら、彼はたしかに自ら川に耳を傾けることでこの秘密に到達するのだが、しかし、時間の存在そのものを認識し、時間という概念に苦しめられるという体験がそこには欠くべからざる前提条件として存在し、その体験へ導いたのがこのカーマラだったからだ。

ではどのようにカーマラは自らに割り当てられたその役割を果たすのか。この問いに答えるために彼女の肉体の描写に注目してみたい。この作品では主人公を含めほとんどの登場人物について、肉体的特徴が描写されていないことに気が付く。たとえば、われわれはシッダールタの髪の色を知らない。そればかりか彼の息子の体格も、ゴーヴィンダの瞳の色も、ヴァズデーヴァの背丈も、なにひとつとして描写から知ろうことはない。仏陀は誰からもひと目で仏陀その人であるととめられたとあるが、しかしその場面においても描写されているのは内面の完成と平和がにじみでた彼の振るまいや仕草・雰囲気であり、身体的特徴ではない。このように、ほとんどの人物があたかも肉体を持たないかのように描かれている一方で、遊女カーマラの描かれ方は異質である。次に引用するのは、初めて彼女がシッダールタの前に現れる場面であるが、彼女の外面について事細かな記述がみられる。

高く結い上げた黒髪の下に、とても明るくやさしく賢明そうな顔を、もぎたてのイチジクのような

¹² Seckendorff, Klaus von: Hermann Hesses propagandistische Prosa. Bonn 1982 S.55.

鮮やかで赤い口を、手入れされ高いカーブに描かれた眉を、賢く用心深い黒い瞳を、緑や金の上着からのびる白く長い首を、幅広の金の輪をはめた長くほっそりとした白い手がひざの上におかれているのを、彼は見た。(393)

官能の世界の主であるカーマラが、このような肉体的魅力を中心に表現されるのはむしろ当然のことかもしれない。しかし、注目すべき点は、彼女の肉体がこのように若く美しい様子から老いて醜くなった姿まで、その変化を映してゆくことにある。そして、その変化はシッダールタに、精神のみに従事する沙門の時にはけっして経験することのなかった恐怖を引き起こすことになるのである。それは彼が小児人のもとで過ごすようになって十年を経たころに起きた。

彼女の目元にそして口もとに、彼は今まで見つけたことのない恐ろしい文字をはっきりと読みとった。細かなしわとかすかな恐怖で書かれた文字、それは秋を、そして老いを思い起こさせた。(中略)カーマラの美しい顔に疲れが刻みこまれていた。たのしい目標を持たずに長い道を歩いてきた疲れだった。疲れと始まりかけた衰え、そしてまだ口にされたことのない、おそらくまだ一度も知ることもなかった恐怖が刻み込まれていた。— 老いへの恐怖、秋への恐怖、死すべき運命への恐怖が。(415)

カーマラの衰えてゆく肉体によってシッダールタのうちに引き起こされるこの「老いへの恐怖、秋への恐怖、死すべき運命への恐怖 (Furcht vor dem Alter, Furcht vor dem Herbste, Frucht vor dem Sterbenmüssen)」とは、時間をもたらす人間の避けがたい宿命への恐怖である。この場面の翌日、シッダールタはカーマラのもとで経験すべきことを全て終えたかのように彼女のもとから去っていく。ここで初めて彼が体験した恐怖はすぐに解決されることはなく、時間は存在しないというあの秘密を川から得るまで、彼の中でいわば留保され、熟成されていったにちがいない。

常に変化を続ける存在としてのカーマラの役割はこれで全てではない。この作品において彼女ほど時間による変化を克明にする人物はいない。それはすでに述べたような肉体的描写によって示されるだけではない。初め若い女性として登場したカーマラは、つぎに妊婦として、母として、そして最後には死にゆくものとして、あるいはまた娼婦から仏陀の信奉者へと、その姿を変化させる。ゴーヴィンダやヴァズデーヴァ、あるいはカーマスワミが常に巡礼者や渡し守、商人でありつづけ、その姿をほとんど変えることがないのに対して、カーマラのこの変化は際立っている。まさにこのように常に変化しゆく存在であるがゆえに、カーマラとの再会と死はシッダールタの中で生命の永遠を、瞬間の永遠をいっそう深く確信させるに足るのである。なぜなら、シッダールタは彼女のすっかり変わってしまった姿のなかにそれでもなお変わらない本質をみとめることになるからだ。これはカーマラにとつ

でも同様であった。というのも、シッダールタもまた、バラモン、沙門、商人、そして渡し守とその姿を変化させつづける存在であるからだ。死が近づいた彼女は次のように語りかける。「あなたの眼も変わってしまいましたね。本当にすっかり変わってしまいました。けれど、なぜあなたがシッダールタだとわかるのかしら。これはあなたですね、ただあなたではないのだわ。(441f)」そして、シッダールタは彼女の老いて疲れた死骸のなかに、若いころの自分と彼女の姿を見る。この瞬間、彼らは時間を超越した。つまりあの川の秘密を体験したのだ。こうしてカーマラの老いゆく姿によって体験した人間の根源の恐怖、死の運命に対する恐怖を、シッダールタは、彼女の死にゆく姿によって昇華させることになるのである。

2. 2

インドの愛の神・カーマデーヴァの名を模すカーマラの役割を多くの研究者が肉体的な愛・官能のみに置中で、Chen がさらに、カーマラは「息子を委ね、シッダールタに盲目的な愛を呼び覚ますことによって¹³」彼に決定的な愛の認識を得る手助けをするのだと指摘しているのは的確である。しかも、子に対する愛情を体験するようになることは、シッダールタにとって、肉体から精神への段階的な愛情の発展を示すにとどまらない。なぜならば、息子を得ることでシッダールタが体験する盲目的な愛とは小児人(Kindermensch)の特性であり、小児人の生を受け入れることは彼の完成にとって不可欠のステップだからである。それゆえ、カーマラのこの役割はさらに重要な意味合いをおびていることになる。

ここで少し物語を振り返り、小児人とシッダールタの関係について考えてみたい。娼婦カーマラの恋人となるため、シッダールタは富豪のカーマスワームの家に住み、商人となる。美しい着物や靴を身につけ、贅沢な食事をとり、酒を飲む世俗の生活、小児人の生活を始めるのである。商売を学び、多くの取引がシッダールタに任せられるようになるが、「彼の現在の生活、その価値と意味は、カーマラにあるのであって、カーマスワームの商売にあるのではなかった(404)」。というのも、世俗の生活を営みながらも、彼自身は世俗の人びとの傍観者に過ぎなかったからである。同じ世界に住みながら、依然シッダールタにとって世俗の人間の喜びも悲しみも怒りもまったく縁のない遠くの出来事であった。

『荒野の狼』で、主人公ハリー・ハラーは自身の内部における対立とともに、取り巻く世界すなわち小市民的生と自身の間の対立に苦しむ。その苦悩とは外部の社会の市民的要素を自己の内部にもまた認めるがゆえの葛藤である。ところがシッダールタは、本質においては完全に沙門であり小児人に

¹³ Chen, Zhuang Ying: *Mystische Elemente aus West und Ost im Werk Hermann Hesses*. Bern 1978 S.124.

対し常に自分を優位に置いているので、彼らとの間に確固たる隔たりが存在する。それゆえに、彼は小児人に抵抗する必要もなければ、葛藤にいたるはずもなく、彼らをただ傍観していられるのである。

では、シッダールタと小児人を分かち決定的なものとはなんであったか。ここで作者は彼らを分かち根本原因を愛に置くのである。シッダールタは自らカーマラにこう語る。「私たちのような種類の間はおそらく愛することはできないのだ。小児人にはできる。それこそ彼らの秘密だ。(410)」たしかにシッダールタは愛を学ぶためにカーマラのもとにやってきた。しかし、彼女から学んだ愛はつねに快楽であり、官能を満たすものであり、技巧であったがために、小児人の持つあの盲目的な愛とはまったく異なるものであった。この決定的な要素の欠落のために、どれほど世俗の生活の中へ深く浸りこんでいったとしても、彼は小児人になることはできないのだ。またそれゆえ、彼はこのうわべだけの生活の無意味さに絶望し、小児人の世界から逃げ出さねばならないのである。

絶望から川のほとりで自殺を試みたその時ようやく、シッダールタは、青年時代から培ってきた、自らを賢者であると自負するその高慢な生に気づき、これまでの生活がこの小我を捨てるための道のりであったのだという認識にうたれる。しかし、彼が真に小児人の生を自身のうちに受け入れ、自らの小我を超えるためには、さらなる体験が不可欠であった。すなわちそれが、沙門と小児人を隔てるあの決定的な要素、愛の体験である。単に父性愛へ目覚めさせるためにというよりも、むしろこの完成に不可欠なステップへの導き手として、カーマラは渡し手となった主人公の前に幼い息子を連れて戻ってくるのである。

カーマラが亡くなると、シッダールタはわがままや贅沢に慣らされた反抗的な息子に献身的に愛情を注ぎこみ、今や彼もまた「完全に小児人となってしまった。一人の人間のために苦しみ、一人の人間を愛し、愛に我を失い、愛のために愚か者となった(448)」。やがて少年が町へと逃げ出し、息子を失ったシッダールタは愛ゆえの苦悩、小児人の苦悩をいっそう痛切に体験する。「彼はもはや以前のようには賢明に、そして高慢に人びとを見ることができなかった。その分彼は、あたたかく、関心をもって、仲間のように彼らを見つめるようになった。(中略)この人びとは盲目的な誠実さにおいても、盲目的な強さと粘り強さにおいても、愛するに値し、賛嘆するに値した。(453)」このように息子一人に向けられていた愛はしだいに、すべての人間あるいはすべての被造物への愛へと変化してゆく。いまや彼の前に置かれた最後の試練は子を失った父の苦悩を乗り越えることであり、この試練を克服する時、彼はすべての被造物への完全なる愛を手に入れ、「彼の自我は統一の中へと流れ込む(459)」。

遊女カーマラが導く先には、最終章でシッダールタが自らの悟りのなかで最も重要なもののひとつであると説く昇華された愛が存在するのである。

3 完全な主人公シッダールタ

ゴーヴィンダはシッダールタと別れることにより彼に内面への道をたどらせ、カーマラは息子とともに帰ってくることで、無時間性と愛という最終的な認識へと彼を導く。このように他の作品では主人公を葛藤のふちへと追いやる役割を担っていた登場人物たちも、この作品においては、その役割の一切でもって、主人公を目標に導く。つまり、葛藤に揺れることのない主人公をもつこの作品では、登場人物たちも障害ではなくむしろ踏み石となって、主人公を悟りという一点に向かって突き進ませているのである。

ここで主人公シッダールタ自身の描かれ方についても目をむけてみたい。そもそも、シッダールタは子供のころからすでに他の人間よりも優位にあり、輝かしい未来を約束された特別な存在として設定されている。そして主人公の持つとされる特性のうちでもっとも注目すべきことは、彼がはじめから「彼の本質の内側に壊しがたく、宇宙と一体である真我(Atman)の存在を知ることができた(355)」ことである。これはとりわけシッダールタが傑出した存在であることを証明する。それは『デミアン』の主人公シンクレールを例にとり、比較することでより明確になる。シンクレールは暗い世界と明るい世界を行き来し、両極に引き裂かれる葛藤を経験した後、最終的に、目標である真の自己(『シッダールタ』においては「真我」と表現される)を認識するに至る。一方シッダールタはすでに指摘したように、物語の初めからその認識をもつ。つまり、シンクレールがさまざまな困難の末にたどり着くゴールは、シッダールタにとってはスタートに過ぎないのだ。さらに、シッダールタはすでにその真の自己(真我)が宇宙と一体であるという認識を持ち、真我を生きたことこそを目標とする。このように『デミアン』で投げかけられているのが自己の存在にまつわる問題だとすれば、『シッダールタ』で投げかけられるのは、さらに進んで生きることに関する問題なのである。ところで、こうした成長過程における葛藤の不在は必ずしも苦悩の不在であるとはいえない。事実、悟りにいたるまでのそれぞれの段階においてシッダールタは苦悩と挫折の体験を繰り返す。しかしながらそれらの経験は、たとえば目標に到達するために進むべき道を見極めきれていないゴーヴィンダの迷いとは根本的に異なっている。シッダールタの苦悩は自らの目指すべき真我という到達点を明確に認識した上で、そこへ向かいゆくために不可欠なステップに他ならない。彼はこの真我を体験することに人生のすべての価値と意味を置き、それ以外のものにはたとえそれが世間的にあがめるべき対象であろうとも何ら頓着することはない。彼が新しい一歩を踏み出す時には常に、その時点での自身の生に対して意味があるのか、価値があるのかという問いかけのみが存在するのである。人生の意味と価値の追求というこの高次元目的観こそが、二極間を揺れ動く葛藤にかかわって、ストーリーを引っばってゆく原動力となっているのである。

さらに、そもそも「目的に到達した者」という意味をもつ彼の名前から明らかであるように¹⁴、作者は初めから主人公の成功をいわば約束している。またゴーヴィンダはまだ物語の始まらないうちから、シッダールタが「普通のバラモンにはならないだろう」ことを、「多くの群れの中にいる善良で愚かな羊にもならないだろう(356)」ことを予言する。

このように、登場人物の助けによってだけでなく、その際立って優れた特質によっても勝利を約束され、シッダールタは目標へと真っ直ぐに進んでゆく。このようなある意味で完全無欠の人物が主人公として設定されていることについては、リアリティの欠如という観点から批判が少なくない。Murti はこれを作者の失敗であると痛烈に批判する。

シッダールタは決定的な認識を所有しているという点において、はじめからすでに完全な人間である。それゆえに作品には説得力が欠けている。永遠なるもの(仏陀やヴァズデーヴァ)の段階に至ったシッダールタを描くことを試みる時、ヘッセは内面的な葛藤を表現することによって可能となったかもしれないもうひとつの実りある選択肢をみすみす逃したのである。(中略)シッダールタの成長は普遍的に他に当てはめることのできないものであり、それゆえ作品は訴える力を失っている。¹⁵

こうした批判は、一連のヘッセ作品が示すスタイルをこの作品にもあてはめようとした結果であると考えられる。つまり、作者本人の姿が投影されたあの未熟な主人公の苦悩と成長の物語をシッダールタにもあてはめようとしたためである。

作家がその作品の主人公に自分の姿を投影して描くということは、程度の違いはあるにせよ、多くの場合に認められることである。とりわけヘッセの場合は、ほとんど彼の幼き日の自伝と呼んでよいような『車輪の下』や、H.H.のイニシャルを持つ主人公が登場する『荒野の狼』や『東方巡礼』(1932)などを例にあげるまでもなく、その傾向が強い。ヘッセは自ら「私が書いてきた散文作品のほとんどすべては根本においてモノログである¹⁶」といったことを多くの機会に明かしているが、自らの内面的感情を主人公に映し出すばかりでなく、上に挙げた作品のように、意識的に彼自身と同一視させるような主人公を登場させる場合さえある。そして、彼らを未熟で悩める人物として描き、その成長と発展を追うというのがヘッセの小説のいわばスタイルとなっているのである。それゆえ、シッダールタのように作者の姿をそこにみつけるところか、多くの人にとって共感すらできないような超越した人物が主

¹⁴ Pfeifer, Martin: Hesse-Kommentar zu sämtlichen Werken. München 1980 S.167f. 参照。

¹⁵ Murti, Kamakshi P.: Die Reinkarnation des Lesers als Autor. Berlin 1990 S.127.

¹⁶ Hesse: Gesammelte Schriften. 12 Bänden. Frankfurt a. M. 1957 Bd.7 S.303.

人公として現れた時、それを作者の失敗であるとみなす批判が出てくるのも、理解できないことではない。

しかし、あえて主人公をこのように現実感に欠ける完璧な人物として創作した作者が、そもそも他の作品同様主人公の成長を描くことを目的としていたのだろうか。むしろ、ヘッセの作品群から多くの点で逸脱したこの作品には、他の作品にはみられない作者の意図が存在すると考えるべきではないだろうか。その根拠として、この作品がシッダールタの悟りを描いてなお終わらないということが挙げられる。

シッダールタの目標への到達は第十一章に描かれる。最後の試練、子を失った親の痛みとむなしく戦っていることを彼は初めてヴァズデーヴァに明かす。そしてヴァズデーヴァに促されるまま川に耳を澄ましたシッダールタは、「生命の音楽、オーム、完成 (Die Musik des Leben, Om, die Vollendung)」を聞く。「この時、シッダールタは運命と戦うことをやめ、苦しむことをやめた。彼の顔には、悟りの明朗さが花開いた。いかなる意志もはや逆らわず、完成を知り、現象の川に、生命の流れに一致した悟り、ともに悩み、ともに喜び、流れに身を任せ、統一に属する悟りであった。(459)」ヴァズデーヴァはシッダールタが悟りに至ったことを確信し、森へと消えていく。ふたりの別れでこの章は幕を下ろす。たとえば『デミアン』では主人公が真の自己を認識するという目的に到達することで、小説全体が完結する。というのも、それに至る成長・発展を追うことが作品のテーマであり、目標の到達が作品全体の結論となっていたからだ。ところが、『シッダールタ』ではそうではない。シッダールタの成長が小説の主たるテーマであるならば、この作品は彼の悟りが描かれる第十一章で完結している。それにもかかわらず、ヘッセはあえてここで作品を終わらせることなく、この後にさらに第十二章を用意したのである。それも主人公シッダールタの若き日の友の名を冠した最終章「ゴーヴィンダ」を。

4 再びゴーヴィンダ

小説にとって最終章が非常に重要な役割を担っていることはいうまでもない。しかし前章で述べたように、この作品における最終章「ゴーヴィンダ」は、主人公シッダールタの悟りがすでに十一章で描かれたにもかかわらず、その後ろにあえて置かれたという点で、とりわけ大きな意味を持つといえる。多くの点で他の作品とは逸脱した特徴を持つこの作品を描くことで、作者は一体何をなさんとしたのか。それを考えるうえで、鍵となるのがこの最終章である。

この章のあらすじは次のようなものである。年老いたゴーヴィンダは、賢者と呼ばれる老渡し守の話を聞きつけ、彼に会うことを念願し川のほとりへやってくる。彼の心の中には不安と模索がいまだ消えることがなかったのだ。彼は川を渡してもらいながらも、その渡し守が自ら正体を明かすまでシッダールタであることに気づけなかった。ふたりは再会を喜び合い、ゴーヴィンダは勧められるままに小屋

で一夜を過ごす。翌日、再び旅立つ前に、ゴーヴィンダはシッダールタに彼が到達した智恵を教えてくれるよう求め、二人の間で智恵をめぐる対話が始まる。

この対話の内容は、とりわけ宗教的な観点から、これまで再三にわたって研究の対象とされてきた。しかし、その一方でゴーヴィンダの果たしている役割についてはまったく無視する傾向にある。悟りに到達した勝利者シッダールタといまだ迷える敗者ゴーヴィンダ、という対照関係のみに着目し、ゴーヴィンダは単なる主人公の引き立て役として解釈されがちだったのだ。しかし、私はこの章に再びゴーヴィンダが登場する意味合いをはるかに大きく、それどころか作品の解釈全体に影響を及ぼしていると考える。作者は、再び登場するゴーヴィンダに、自らの投影であるあの未熟な主人公たちのドラマをたどらせていると同時に、彼の存在によって主人公シッダールタを真理への導き手へと変化させ、そこに自らの理想像を映し出すのである。

4.1

この章に入ってまずわれわれが気づくのは、その視点の変化である。「作者は突然、シッダールタからはなれて、ゴーヴィンダの目線の側に立つ¹⁷⁾」。これまでシッダールタを追いかけていた物語は、彼が目標に到達すると今度は、ゴーヴィンダの姿を追うことになる。小説『シッダールタ』の主人公がシッダールタであるように、ゴーヴィンダはこの「ゴーヴィンダ」という章においてあたかも主人公であるかのように登場するのである。

再びわれわれの前に現れた彼はまず、かつて自らのことを「シッダールタの影であり、やりもちである」と宣言したように、自らを「求める者(ein Sucher)」であるとその立場を明かす。生涯戒律に従い生きてきた彼であったが、その内実はいぜん心に不安と模索を抱える年若い修行僧であった。しかも、ゴーヴィンダは、昔と同じようにいまだ教えの崇高さを信じ、救いを自らの内面ではなく教えに求めるがゆえに、ここでもまたシッダールタに教えを乞わずにはいられない。智恵は教えることができないというシッダールタの言葉も、彼にとってはただ不安や反発を引き起こすのみで、理解することはできない。

ゴーヴィンダはたしかにこのように惨めで愚かな敗者の姿で登場する。しかしそれは単に、内面の道をたどり悟りに至ったシッダールタに軍配を上げるためではない。なぜなら、この章ではゴーヴィンダもまた悟りへとつながる内面の道を歩き始めることが暗示されているからだ。それはまさに物語の最後、ゴーヴィンダがシッダールタと別れる前にもう一度、彼の教えを請う場面に描かれる。シッダールタはもはや悟りをあえて説こうとはせず、ただ自分の上にかがみこみ、額にキスするようゴーヴィンダに求める。

¹⁷⁾Boulby, p.57.

ゴーヴィンダは不審がっていたが、それでも大きな愛と予感にひきつけられて、彼の言葉に従った。彼のほうへとかがみこみ、その額に唇を寄せると、何か素晴らしいことがゴーヴィンダに起こった。(469)

そして次の瞬間、ゴーヴィンダはシッダールタの顔に生命の川を見るのである。それは、シッダールタの到達した、決して言葉では伝えることの出来ない智恵そのものであった。無時間性と世界の全存在の連関と平等と、それらが愛すべきものであるということ、それをゴーヴィンダは瞬時のうちに体験するのである。

ここでシッダールタがゴーヴィンダにキスをするのではなく、ゴーヴィンダの方から自らそうするのには大きな意味が込められている。このキスは『デミアン』のラストシーンをわれわれに思い起こさせる。そこではシンクレールは「暗い鏡の上にかがみこみ、(中略)友にそっくりの私自身の姿をそこに見る(163)」。シッダールタの影であるゴーヴィンダは、すでに指摘したように、自己の外に救いを求めようとする主人公の側面を象徴している。またそれは、この物語のなかで二度にわたって描かれるシッダールタとの再会で、どちらの場合においても、彼がシッダールタを認識できなかったというエピソードにも暗示されている。最初の再会では、ゴーヴィンダは川辺で眠るシッダールタの番をするが、シッダールタが金持ちの衣をまとっているがゆえにゴーヴィンダは彼であると気がつかない。一方、シッダールタは目覚めるとすぐさま巡礼者の姿をした友に気づく。二度目の再会においてもこれは繰り返される。年老いたゴーヴィンダは渡し守の姿をしたシッダールタがかつての友であると気がつくことはできない。こうしたことは、ゴーヴィンダが外見に惑わされその本質を見破ることができない人物であり、さらに彼は自らが影であるそのもう一人の自分に目を向けることができないということを象徴的にあらわしている。そのゴーヴィンダが、決して向き合うことのできなかった自己に初めて向き合うのが、自らの半身であるシッダールタへのこのキスなのである。

さらに、ゴーヴィンダは求めすぎることがゆえに見つけることが出来ない存在であったが、この瞬間彼をひきつけたのはそこに救いを見出そうと求める心ではなく、ただ「大きな愛と予感」だったのだ。それは、内面の道を歩き出したシッダールタが内なる声に従うのと似ている。こうしてゴーヴィンダはいわばもう一つの自己と向き合うことによって、救いを自らの外にある教えに見出そうとするこれまでの生から自ら新たな一歩を踏み出すのである。

さらに、彼が踏み出したこの一歩は彼自身に大きな変化をもたらすことになる。それはこの小説の最後の一文に描かれる。シッダールタの「微笑みは彼に、いつか彼の人生の中で愛したもの、いつか彼の人生の中で自分ににとって価値があり、神聖であったすべてのものを思い出させた(417)」。後で詳しく述べることになるが、シッダールタの浮かべるこの「微笑み」とは、生命の川と同様に、作品全

体を通じて提示される悟り、あるいは智慧の象徴である。ゴーヴィンダが世間的な権威や形式に固執し、そこにしか価値や神聖さを認めることのできない人物として描かれていることはすでに一章で述べたが、その彼がいまや表面的な執着を取り去られ、このように究極的な本質の中に価値あるものを、尊いものの存在を認めるのだ。すなわち、この作品はゴーヴィンダがようやく悟りへとつながる内面の道を歩み出したことを暗示して幕を下ろすのである。

不安と模索を心に抱えた人間が、なにもかも知り尽くしているかに見える友に自らを新しい生へと導いてくれることを願うが、友の言葉は彼のこれまでの価値観と遠くかけ離れているがゆえに理解されず、反発と不安を引き起こす。しかし、その一方では彼は友と友の言葉になにかしらひきつけられるものを感じる。ふたつの間で葛藤し、しかしそれを乗り越える時、同時に彼はこれまでの自己をも乗り越え、真理の一端を体験する。最終章に集約されたこのゴーヴィンダの成長のドラマはまさに、われわれに、ヘッセの一連の作品に特徴的なあの発展のドラマを思い起こさせる。作者自身の姿が投影された苦悩する主人公が繰り広げるあのドラマを。つまり、この作品においては実はシッダールタではなくこのゴーヴィンダこそが、あの主人公たち、シンクレールやクラインやハンス・ギーベンラートに連なる者だったのではないだろうか。

ところで、こうしたことは、いったん中断されたこの作品の執筆の再開に大きく関わっていると考えられる。これまで再三にわたって言及されていることであるが、『シッダールタ』は 1919 年の末に執筆が開始された後、その製作過程で翌年の 8 月、シッダールタがゴーヴィンダと別れるまでの第一部を終えたところで突然、中断されている。当時のヘッセの日記や手紙によると、この中断の原因は、それから先を書くために必要な体験、すなわちシッダールタを「勝利者(Sieger)」として描くために必要な体験が彼に欠けていたことにあるという¹⁸。作者は、「耐え忍ぶ者(Dulder)」や「苦行者(Asket)」としてのシッダールタの姿は自らの経験に基づいて順調に書き進めることができて、いよいよ内面の道を歩み始める姿を描く段になると、もはやそれ以上先へ進めることができなくなったのだ。ところが約一年半にもおよぶ長い沈黙を経て、ヘッセは 1922 年の 5 月に仕事を再開し、数週間のうちにこの作品を完成させている。この空白の期間に作者がなんらかの宗教的体験を得るにいたり、それによってシッダールタの悟りへといたる姿を描くことが可能になったのだという推測に基づいて、ユングのもとでの三度にわたる精神分析や老荘思想への関心の強まりが、執筆を再開させた主な要因としてこれまで指摘されてきた。しかし、実際のところ、そうしたなにかしら決定的な体験というものの存在は彼自身の記録からもその他の資料からもいまだ確認されていない。たしかに、そうした体験の可能性を完全に否定することはできない。しかし、それでもなお、ヘッセ文学におけるあの特徴的な主人公た

¹⁸ »Über das eigene Werk« GW Bd.11 S.48-50 参照。

ちを思わせるゴーヴィンダの成長のドラマをあえて作品の最終章に描き出したという事実をふまえるならば、このように自身の現実の姿を主人公シッダールタではなくこのゴーヴィンダに投影することによって、ようやくヘッセはこの作品の執筆を再開させることができたのだと考えられはしないだろうか。ヘッセはある手紙の中で次のように述べている。「私は教師でも指導者でもなく、告白者であり、志向する者であり求める者なのです。¹⁹」求めつづけるゴーヴィンダを再び登場させることによって、彼はこの作品においても「告白者」となりえたのである²⁰。

4. 2

作者にはさらにもうひとつ、ゴーヴィンダをどうしても再び登場させねばならない理由があった。この章において、シッダールタは迷えるゴーヴィンダを悟りへと導くことになる。はじめ彼は自ら得た智慧を言葉によってゴーヴィンダに伝えようとする。そして次に自らの顔にその智慧をあらわす生命の川を映し出し、それをゴーヴィンダに体験させることで導こうとする。こうしてゴーヴィンダの登場により、これまで求める者として描かれてきたシッダールタはここで悟りへ導く者へと変化をとげるのである。

シッダールタが悟りを自ら得るだけで完結せず導く者へと変化すること、それは、初め神に仕えるバラモンであった彼が最後には人に仕える渡し守になるという変化と一致する。ヴァズデーヴァの口を通して作者は渡し守の仕事について次のように語らせる。

私の仕事はこの川の向こうへ人びとを渡すことだ。たくさんの人を、何千もの人をこれまで渡してきた。私の川は彼らにとって旅の妨げ以外の何ものでもないのだ。(中略)しかしその何千もの人々の中に数人、ほんの四人か五人のわずかな者にたいして、川は障害となることをやめ、彼らは川の声に耳を傾け、聞き入った。私にとってそうであるように、彼らにとって川は神聖なものとなった。(435)

ここには、人を向こう岸へ渡す渡し守の仕事が、時には川に耳を傾けさせるものでもあるという認識があらわされている。さらに、シッダールタが川の声から悟りを得たのを見届けた直後にヴァズデーヴァが森へと去ってゆかねばならない理由もここにある。「私はこの時を待っていたのだ。今その時がきたので私は行かせてもらう。長いこと私はこの時を待ってきた、長いこと私は渡し守ヴァズデーヴァで

¹⁹ GW Bd.11 S.50.

²⁰ たしかにシッダールタは初めから傑出した存在であるが、彼の「師と教えに避難所を求めんとする願望」を象徴するゴーヴィンダとともにある時は、彼はまだ「耐え忍ぶ者」「苦行者」、あるいは「もがき、苦しむシッダールタ」であるがゆえに、ヘッセは自らの体験に基づき、その姿を描くことができたのである。その意味で、結局、ゴーヴィンダは終始この小説の中でヘッセの現実の姿を表現しているといえる。

あった。もう十分だ(459)」という言葉を残して去ってゆくその姿に、われわれは渡し守ヴァズデーヴァの果たすべき使命がなんであったかを知るのである。

そしてこの渡し守の役目こそ、この作品を描くことでヘッセが作家としてまさに成し遂げようとしたことを象徴的にあらわすものではないだろうか。というのも、シッダールタが悟りにいたるまで、作者もまた多くの箇所では智恵というものの本質を伝えんとする試みを繰り返すからである。その試みのなかで、智恵はとりわけ「微笑」と「川」というふたつのシンボルを用いて表現される。ストーリーの展開に沿って、いくつかその例を挙げてゆくことにする。

一つ目のシンボル、微笑はどちらかというと智恵にすでに到達した人間のしるしとして用いられる。シッダールタが仏陀と出会った時、彼にはすぐそれが悟りを得た覚者ゴータマその人であるとわかる。というのも、ゴータマの立ち居振舞いの全てが「安穩と完成を語って」いたからである。このように仏陀の悟りは彼の姿を通じて表現されるのだが、中でもその半面の微笑は仏陀の崇高さや神秘性を表現するものとして繰り返し描写され、「永久にシッダールタの記憶に刻み付けられた(382)」。こうした独特の意味を持つ微笑はこの小説の中でたびたび登場する。たとえば、ヴァズデーヴァはほとんど言葉を発することはないが、常にこの微笑を顔に浮かべている人物として描かれ、それによってわれわれは彼もまた仏陀同様、すでに悟った者であると知るのだ。さらに、つぎのような記述は、川で渡し守の生活を始めたシッダールタが徐々に完成へと近づいていることを暗示する。

少しずつ彼の微笑みは渡し守のそれと似通ってきた。その微笑はほとんど同じように輝き、ほとんど同じように幸福につらぬかれ、同じように数千もの小さなしわから光を放ち、同じように子供らしく、同じように老人のようであった。多くの客がこの二人の渡し守を見て、兄弟だと思った。

(437)

もう一つの重要なシンボルは川である。作者はこれによって智恵そのものを表現しようとする。まず、川の秘密に関する次のような描写のなかで、ヘッセは智恵のなかの重要な無時間性という要素を表現することを試みる。

水は絶えず流れ、しかもそこにあった。いつもどんなときでも同じものであり、しかもどの瞬間にも新しい。(432)

シッダールタはこの川の秘密を理解することで一切の秘密、すなわち真理を得ることができるだろうというインスピレーションを得、川に留まることを決意する。またある時には、雨期で増水した川の激しい流れから、「王の声を、兵士の声を、雄牛の声を、夜の鳥の声を、産婦の声を、ため息をつく者の、ま

だ他にも無数の声を(437)聞き、そのすべてを同時に聞くことが出来たならそれはオームすなわち完成であることを予感する。シッダールタが完成に近づくにつれて作者はより鮮やかに川の姿を描き出し、われわれの前に彼の求める智慧・真理の本質を浮かびあがらせていくのである。そして、いよいよシッダールタが悟りを得る瞬間、川は次のような姿を呈していた。

それらはみな溶け合っていた。憧れの訴えと知者の笑い、怒りの叫びと死にゆく者のうめき声、全てが互いにからみ合いつながり、無数の層になって重なり合っていた。そしてすべては、すべての声は、すべての目的は、すべての憧れは、すべての苦しみは、すべての歓楽は、すべての善と悪はいっしょになり、世界そのものとなった。すべてがいっしょになったもの、それは現象の川、生命の音楽であった。そして、シッダールタが(中略)すべてを聞き、全体を、統一を聞いたとき、無数の声の大きな歌はたったひとつの言葉から成り立っていた。それはオーム、完成であった。(458)

この時ヴァズデーヴァのあの微笑も輝きを放ち、川同様智慧を表現する。シッダールタもまた同じ微笑を浮かべ、それゆえにわれわれはこの瞬間、彼が悟りに至ったことを知るのである。

このように微笑みや川の声などの要素を用いて象徴的に表現されることによって、われわれはそれがあたかも目の前に描き出されるかのように感じ、真理そのものを体験し、その本質を捉えたような感覚に陥る。ヘッセはある手紙のなかで『シッダールタ』に関して自ら次のように述べている。

この試みにおいて重要なのは、ご存知のとおり、「美しい言葉で小説を書くこと」ではなく、若い人たちがしばらくの間再び生きる助けとなるような信念に土台を作ってやることなのです。²¹

この告白からわれわれは文学的使命に寄せる彼の信念を垣間見ることができる。彼が重きをおくのは、言葉の美しさの追求ではなく、読者に作品からなんらかの助けを掴みとらせる、まさに智慧の川を渡すことで悟りへと導かんとする渡し守の役目なのである。

しかし、ここに大きな矛盾が生じる。智慧は自らの体験によってのみ得ることができ、いかなる教えによってもそこへ至ることはできない、なぜなら智慧とは伝達不可能だからである — これが小説『シッダールタ』の大前提である。シッダールタはこれにすでに物語の序盤で気づく。だからこそ、彼はその教えに深く心を打たれたのにもかかわらず仏陀のもとを去り、自らの体験によって真理へとたどり着くために、内面への道を歩き始めなければならないのだ。ある手紙の中で、ヘッセは次のように述

²¹ An Hilde Saenger. (1931) – Gesammelte Briefe. Bd.2 S.304.

べている。

智慧は教えることができない、というのが、私の生涯でいつか文学として表現せねばならない体験でした。その試みこそ『シッダールタ』なのです。²²

作者はこの作品においてふたつの相容れないことを同時に成し遂げようとしている。つまり、教えの否定を主張する一方で、智慧を伝えようと試みているのである。作家がどれほど巧みに智慧を表現しようとも、読者は智慧そのものを実際に体験することはできない。それゆえ、彼の渡し守たらんとする試みは決して実ることのない挑戦なのだ。

そしてまさにここに、ヘッセがシッダールタを求める者から導く者へ変化させることなく小説を終えることができなかった理由があるのではないだろうか。彼は自らが乗り越えることのできなかった部分をシッダールタに委ねるのだ。シッダールタはラストシーンでこの矛盾を現実ではありえない方法で超える。すなわち、言葉ではなく、自らの顔に生命の川を浮かべ智慧そのものを体現することで、彼はボーヴィンダにそれを体験させるのである。

彼は友シッダールタの顔をもはや見ていなかった。そのかわりに彼は別の顔を見ていた。たくさん人の顔を、長い列を、何百もの、何千もの顔の流れる川を見ていた。それらはみな、やってきては過ぎ去って行き、しかしまた同時にそこに存在するように思われた。すべてのものは絶えず変化し、新しくなった。しかしすべてのものはやはりシッダールタであった。彼は魚の顔を見た。終わりのない苦しみに満ちて口を開ける鯉の顔を、はちきれんばかりに目を見開いた死にかけている魚の顔を見た。― 彼は生まれたばかりの赤ん坊の顔を見た。赤く、しわだらけの泣き出しそうにゆがんだ顔を。― 彼は殺人者の顔を見た。彼が人間の体に刀を突き立てるのを見た。― 同じ瞬間、その罪人が捕らえられてひざまずき、刑事によってその頭を刀で切り落とされるのを見た。― 彼は裸の男女の肉体が荒れ狂う恋の攻防をしているのを見た。― 彼は死体が横たえられているのを見た。静かに、冷たく、虚しく。― 彼は動物の顔を見た。猪の、ワニの、象の、雄牛の、鳥の顔を。― 彼は神々を見た。クリシュナ神を、アグニ神を見た。― このすべての姿と顔が互いに無数の関係を結び、それぞれ助け合い、愛し合い、憎み合い、滅ぼし合い、新しく産み出し合っているのを彼は見た。どれもが死へむかう意志であり、うつろいやすさの悩める痛々しい告白であった。しかし、死ぬものはなく、どれもがただ変化するばかりで、常に新しく生まれ、常に新しい顔を手に入れていた。しかし、それぞれの顔の間には時間が存在することは

²² An Werner Schindler. (1922)― 同上 S.7.

なかった。(469f)

そして、かつての友に対して、ゴーヴィンダは今や「深く地面まで頭を垂れ」、「その胸のうちでは深い愛とつつましい尊敬の念が火のように燃えた(471)」。

ヘッセは「ささやかな神学」(1932)というエッセイの中でとりわけこの「尊敬(Verehrung)」という感情について、「敬虔な人間の生命感と信仰の基本²³」と位置づける。シッダールタはこの時、ゴーヴィンダにとって無条件にその前にひれ伏さねばならない相手、すなわち彼の信仰の対象となり、そればかりか作者ヘッセにとってもまた、自らの作家としての使命へ寄せる信念の理想像となるのだ。さらに、ヘッセ自身もまた、自ら渡し守であろうとするこの挑戦の最後に、作家としての自分に許された方法、すなわち言葉によって、真理の川の様相をここに描き出し、その理想へと限りなく近づこうとするのである。

おわりに

『シッダールタ』の成立前後の時代は、作者ヘッセにとって「危機の時代」であった。精神病院での療養を必要とされる妻の病状の悪化、友人のもとに預けることを余儀なくされた子供たちとの別れ、かさんでゆく治療費や養育費に加えてインフレによる経済苦。さらに第一次大戦中に戦争賛美に警鐘を鳴らした「おお、友よ! その響きではなく!」(1914)以来の非難中傷の嵐は、「ツァラトゥストラの再来」(1920)の発表によって激しさを増していた。さまざまな方面から襲ってくる多くの困難を彼はたった一人でのしがなくてはならなかった。

こうした現実的困難の中で書かれたこの作品は、これまでヘッセの純粋な精神的探求の成果としてとらえられてきた。そうした見解が根拠とするものは、彼が当時すでに20年間にわたって東洋思想を研究していたと同時に、キリスト教、非キリスト教を含めて宗教というものが彼にとって研究対象以上に深い意味合いを持っていたという事実である。

しかし、一方で、あくまでも小説としてこの作品を読み、彼の一連の作品と比べた時に浮かびあがる特徴に注目した時、そこにわれわれは彼の作家としての態度の表明という、新たな解釈の可能性を見る。渡し守シッダールタに自らの文学的使命の理想を描き、彼が解脱にいたる過程を描くことでその理想に近づかんとするこの試み、それは、家族も地位も名誉も失わんとする、つまり、純粋に書くことだけが彼の存在を証明してくれる「危機の時代」にあったヘッセにとって、不可欠な作業であったのかもしれない。たとえそれが、智慧の非伝達性という乗り越えられない矛盾をはらむ試みであったとしても、否、それゆえいっそう、この作品の執筆はきわめて純粋に書くことそのものの本質に迫る挑戦であったにちがいない。作品中、ゴーヴィンダは次のように語る。「私は求めることをやめないだろう。そ

²³ GW Bd.10 S.381.

れが私の運命のように思えるのだ。(460)」「私の道はしばしば困難で、暗いのだ、シッダールタよ。(468)」ここにわれわれは自らの作家としての使命に忠実であらんとするヘッセの心の叫びを聞かずにはいられない。しかしそれでもなお、彼はゴーヴィンダが完成への道、シッダールタへの道を歩み始めることを暗示してこの作品のラストシーンとした。すなわち、永遠の求道者でありながらしかし、同時に新しい一歩を踏み出す存在としてゴーヴィンダを描き、作家ヘッセはそこに限りない理想に立ち向かう自らの展望をも示そうとするのである。

Über Hermann Hesses »Siddhartha«

– Das Problem der Konfliktlosigkeit –

NAKAHARA Kaori

Hermann Hesses »Siddhartha« ist bis heute hauptsächlich unter Aspekten der verschiedenen Religionen interpretiert worden, aber bei einem genaueren Vergleich mit anderen Werken Hesses sieht man, daß hier ein Element fehlt, das für die anderen Hauptwerke charakteristisch und unentbehrlich ist, nämlich ein Konflikt.

Die Personen – der Mann, der das zweite Ich des Helden ist, und die sexuell reizende Frau, die die Hauptfigur zur Welt der Sinne führt, – die in diese zwei Typen eingeteilt werden können, spielen in anderen Werken Hesses die Rolle, den Protagonisten in einen Strudel des Konflikts geraten zu lassen. In »Siddhartha« entsprechen Siddharthas Freund Govinda und die Kurtisane Kamala diesen zwei Typen, aber ihre Rolle ist eine ganz andere. Govinda symbolisiert den Wesenszug Siddharthas, unbedingt Zuflucht zu Lehren zu nehmen, und er trennt sich von Siddhartha, um ihn damit dazu zu bringen, den Weg zum Inneren zu gehen. Damit Kamala Siddhartha zu der für seine Vollendung unentbehrlichen Erkenntnis von Zeitlosigkeit und Liebe führen kann, bringt sie seinen Sohn zur Welt, kehrt mit ihm zum Helden zurück und stirbt.

Wenn die Rolle dieser Personen, den Helden nicht zum Konflikt, sondern zur Vollendung zu führen, und seine eigenen überlegenen, erfolgverheißenden Eigenschaften in Betracht gezogen werden, darf das Werk wegen des Mangels an der Realität nicht als die Entwicklungsgeschichte von der unreifen, leidenden Hauptfigur, die in einer Reihe von Hesses Romanen das Bild des Autors widerspiegelt, interpretiert werden. Der Schlüssel für die Geschichte Siddharthas, die von anderen Werken dieses Autors abweicht, findet sich im letzten Kapitel „Govinda“, das noch hinter die Schilderung der Erleuchtung des Helden gestellt ist.

Denn der Autor behandelt Govinda, der die Erleuchtung noch nicht erreichen kann,

als Hauptfigur in diesem Kapitel, und beendet das ganze Werk mit der Szene, in der Govinda endlich einen Teil der Wahrheit, die sich auf dem Gesicht Siddharthas verkörpert, erlebt. Das heißt: im Werk findet man nicht in Siddhartha, sondern in Govinda die Gestalt des für Hesses Werke charakteristischen Protagonisten. Außerdem verwandelt Siddhartha sich hier von einem Sucher zu einem Wegweiser zur Weisheit. Auch Hesse versucht mit dem Ziel, Wegweiser für den Leser zu werden, in der Geschichte Siddharthas zur Erleuchtung durch die Beschreibung des Flusses und des Lächelns das Wesen der Weisheit darzustellen, aber dieser Versuch widerspricht völlig der Unlehrbarkeit der Weisheit, die eine notwendige Voraussetzung dieses Werks ist. Deshalb zeigt Siddhartha, der in diesem Kapitel das überwindet, was der Autor selbst auf keinen Fall erfüllen kann, das Idealbild Hesses als Dichter, und Govinda, der zwar der ewige Suchende ist, aber den Weg nach Siddhartha zu gehen beginnt, zeigt sein tatsächliches Bild, das seiner literarischen Aufgabe treu zu sein versucht.